せんぼく探訪 VOL.30

市指定有形文化財（絵画）

・指　定　名　称　海靄蟠桃の図（かいかくばんとうのず）　常世翠巒作
・員　数　・　形　状　1幅　絹本 98.8cm×31.7cm
・指　定　年　月　日　昭和56年3月24日
・所　　有　　者　個　人

常世翠巒（とこよすいらん）

明和4年（1767）～文化11年（1814）

角館芦名氏家臣、後佐竹北氏に仕えた家柄。狩野派、北宗画を独学後「池大雅（いけたいが）の門人片山無知（かたやまむち）（伊勢＝三重県出身）を師とし、南画、南蘋画（なんぴんが）も書く。

門人に武村文海（たけむらぶんかい）、森田珉岑（もりたみんしん）もいる。

この絵は、中央に太陽を描き、荒海の中に細密に描いた鶴や桃の木を配した南蘋画の特徴を色濃く表した作品である。

市指定有形文化財（絵画）

・指　定　名　称　岩瀬風景屏風（いわせふうけいびょうぶ）
西宮礼和作
・員　数　・　形　状　六曲一隻　紙本 110.5cm×302.0cm
・指　定　年　月　日　昭和56年3月24日
・所有者及び管理者　個　人

西宮礼和（にしのみやれいわ）

嘉永3年（1850）～大正9年（1920）

角館田町下丁に生まれる。西宮家は“今宮五十五騎”の一つに数えられる常陸（茨城）以来の佐竹武士。21歳で戊辰戦争に出陣、角館岩瀬河原の戦いで奮闘した。平福穂庵の門人となり、45歳頃上京し画家生活をするが、郷里には時々帰り、荒川青亭、小野崎大凌、大館の石川秀穂を育てた。子の仙凌も画家で、東京美術学校に入り寺崎広業門下、のち野田九浦について日本画をよくした。礼和の兄雷治は、「角館のお祭り」の人形作り名人だったという。

この絵は、礼和晩年の大正7年の作で、幕末期の玉川が荷物運搬の交通機関として利用されていた頃の岩瀬風景が描かれており、街道に沿う人家や帆掛け船が当時を偲（しの）ばせる。